

1
(妻)

女はみすばらしい姿をした最初の夫を見かけた。その男は上着の襟を立て、通りで物乞いをしていた。信号が青になると、女はハンドルを切って、歩道沿いに車を停めた。愕然としながら、目を見張った。

女はわが目を疑った。窓ガラスを下ろした。そして見た。

男は不意に女に気づいた。

そして、女が誰なのか分かった。

唇は動くが、何を言っているかよく分からない。

少しずつ唇が震え始める。

遠くの女を前に、かつての夫は子供のように泣き始めた。男は自分の手を女のほうに向けて差し出した。た。

頭をわずかに横にかしげ、よろめきながら懇願し、女に向けて手を差し出したとき、男の頬を涙が静かにつたつた。彼は近づいていった。

足取りは少しずつ早くなった。

男の行動にすっかり動揺した女はギアを入れ、車を出した。

そうするしかなかった。男が駆け寄ってくるや女は車を出したのだ。

自宅に戻ると、すぐに気分が悪くなった。女は思った。「なぜ彼に言葉をかけてあげなかったのだろう。ありえない。でも本当に彼だったのだろうか。他人のそら似だったのかもしれない。私の知らない兄弟が彼にいたのかもしれない」。この思い出は女を苦しめることになった。女は何度もあの通りに戻った。その度に、あの物乞いが寄りかかっていた半円の鉄枠の扉の前に立った。その通りで数時間を過ぎた。再び男の姿を見ることはなかった。

2 (谷崎潤一郎の母)

一九五〇年代初頭、谷崎潤一郎は自らの幼年期の思い出の大部分をまとめた。母親はとてもきれいな人だった。彼女は若くして潤一郎を授かった。彼は、母がたいそう面白がったある逸話を語っている——生涯、息子のことが、その作家としての名声が話題になるたびに、決まって母はその逸話を語るほどだった。母親と同じ年頃の、当時まだ独身だった親友の女性は、出産がどういふものかを知り、愕然として次のように言ったという。

「とんだところから生まれるのね！」